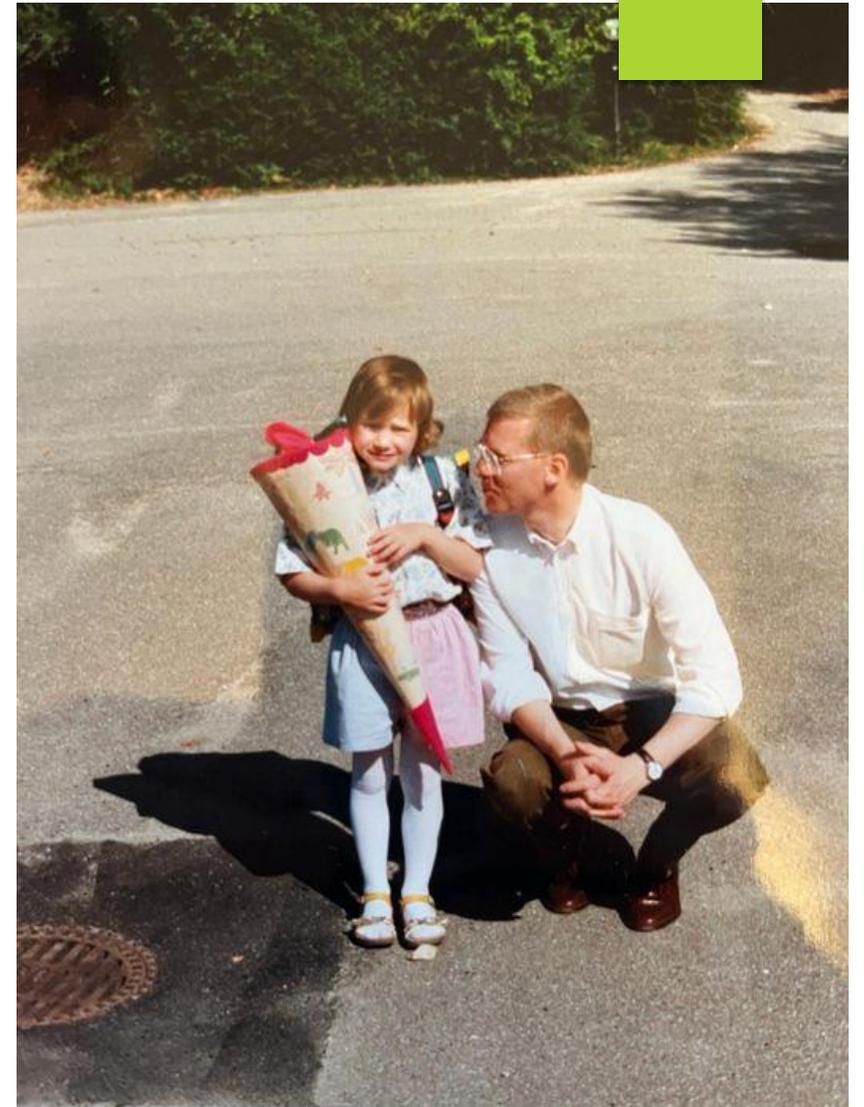


4月

「Das deutsche Schulsystem」 アントニア・シュルト

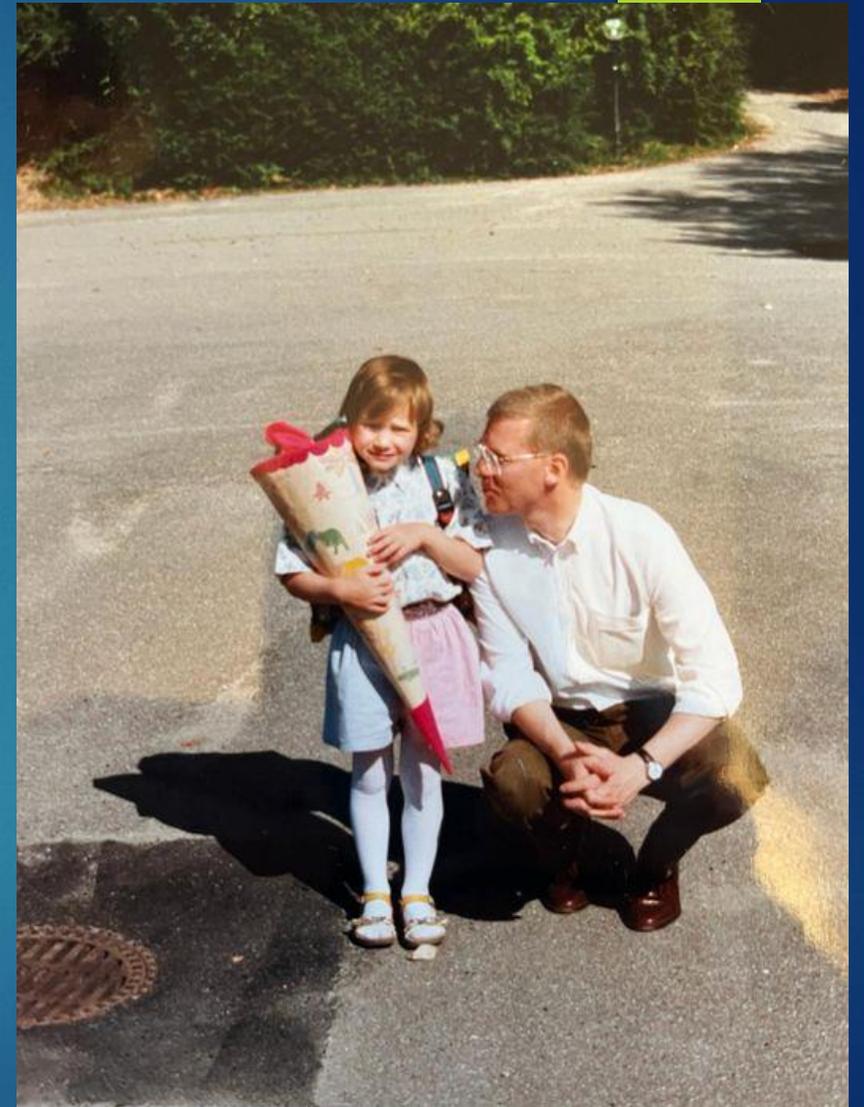
1. 「初恋の人は中学校1年生のクラスメートでした。」とか「アメリカで留学したのは高校3年生の頃でした」のような言い方は日本でよく耳にしますが、私が学生時代について聞かれたら、まず頭の中で計算をしないといけません。なぜかという、ドイツの教育制度は日本ときわめて異なるからです。ドイツでは小学校に4年通った後、Gymnasium (ギムナジウム)、Realschule (リアルシューレ実科学学校)、Hauptschule (ハウプトシューレ基幹学校) この三つのいずれかに進学します。



2.ギムナジウムとは、日本でいうと小学5年生から高校3(4)年生までの8(9)学年があり、大学への進学を前提として、通う学校です。なので、「ソフトボールをやったのはいつ?」と聞かれると、まず「ギムナジウムの7年生」というのを日本人の相手がイメージできるような表現に言い換えなければなりません。

いわゆるギムナジウムに進学することになったのは、4年間の小学校が終わった後、10歳の時でした。ドイツの多くの州では保護者や本人の希望ではなく、学校側の推奨で進学が決まり、生徒の将来にも大きな影響を及ぼすため、10歳で自分の進路が決まってしまうドイツの教育制度に疑問を持つ人もいます。

ドイツでは、州または学校によって、8学年か9学年があります。



3.ここで一度、ギムナジウムの言葉の由来について説明したいと思います。英語から日本語に入った「ジム」と同じ語源ですが、ドイツ語の場合は運動施設の意味ではありません。この言葉は古代ギリシアで身体の鍛錬をする場所であったギムナシオンに由来します。知識的な議論や教育にも利用されたので学校のことを指すようになりました。

学校という意味でのギムナジウムはギリシア文化をモデルにした古代ローマに継承され、高度的な教育を受ける学校と知られてきました。ラテン語を中心に、ギムナジウムは古典語教育を受けることで、大学の準備という役割を果たしていました。18世紀まで西方ヨーロッパ諸国では学術言語だったのは英語ではなくて、ラテン語でした。そのため大学を目指す場合、ギムナジウムで学ぶのが一般的でした。1788年、プロイセン政府によって「アビトゥーアと呼ばれる大学入学資格が導入され、以前は貴族や裕福な市民の子供であれば、ギムナジウムで学ばなくても大学進学が可能だったという欠点を正しました。ギムナジウムがエリートコースだとすれば、実科学校が専門職コース、基幹学校が就職コースと言っても良いでしょう。事務職やマイスターの専門職を目指したい人は実科学校に通います。将来は専門大学で自分を進む道を極めることができます。



4. 戦後しばらくは、日本の中学校にあたる5年制度の基幹学校に80%近く生徒が通っていましたが、現在15%程度に減っており、グローバル化による外国籍の生徒や低所得層の子供の学校へ移行してきました。ドイツの教育制度は改良が必要なところがあるというのが2007年のPISAショックを受けたときに明らかになりました。経済協力開発機構（OECD）が15歳の生徒を対象に学力を測る・比べるもので、2007年は第一回の結果が発表されました。参加した32か国の中、ドイツは読解力で21位、数学的リテラシー、科学的リテラシーで20位という成績でOECD平均を下回りました。学校種別ごとに格差がみられ、成績分布はジムナジウム。実科学校、基幹学校の順に下がっていく、逆に外国のルーツを持つ生徒の比率は高くなりました。現在の制度が「bildungsferne Haushalte」

（教育から遠い家庭）を高等教育から遠ざけ、社会格差を固めているという批判の声が聞こえられました。最近のPISAの結果（2022年）を調べたら、ドイツのそれぞれの点数が今一低く、科学的リテラシー以外OECD平均を下回っています。ちなみに、日本は数学的リテラシーで5位、読解力で3位、科学的リテラシーで2位という結果でした。日本を見習ってみてもいいのではないかと思います。

